

埼玉大統一選さいたま市世論調査

④

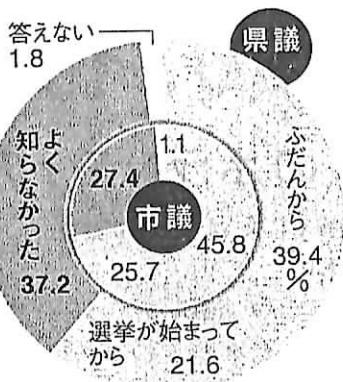
選挙の際、有権者は何を基準に、どの段階で投票する人を決めたのか。埼玉大経済学部の松本正生研究室が、読売新聞さいたま支局と協力して実施した統一地方選前半戦(県議選、さいたま市議選)の世論調査で、有権者が「身近な市議」と「存在感の薄い県議」というイメージを抱いている傾向が裏付けられた。

■人物知らずに 調査は投票日直後の4月12日に、さいたま市在住の男女1500人を対象に質問を郵送して実施。5月2日までに780人が回答した(有効回収率52%)。

選挙で投票した人に、投票した候補者をいつから知っていたかを聞いたところ、市議選、県議選とも6割強の人が「選挙前から知っていた」と回答。しかし、

県議 存在感薄く

候補者の人柄や考え方をどの程度知っていたか



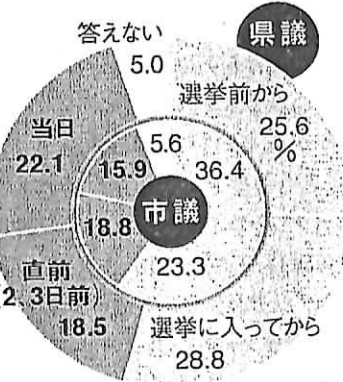
これら候補者の知名度に関する項目について、松本正生教授は「県議選は市議

身近な市議と対照 有権者選択戸惑う

市議選の26.6%、県議選の31.3%が「選挙まで知らなかった」と答えた。さらに、候補者の人柄や考え方をいつの段階で知ったかという問いには、「ふだんからある程度知っていた」としたのが、市議選45.8%、県議選39.4%。「良く知らなかった」は、市議選27.4%だったのに対して、県議選は37.2%だった。

選に比べ、候補者の人柄を知らないまま、政党名などから判断して投票する傾向が高いようだ」と分析。県議、市議の知名度の違いは投票先を決める時期にも影響したと指摘して

誰に投票するかを決めたのはいつか



実際、「だれに投票するかをいつ決めたか」との問いに対して、市議選は36.4%が告示前に決めていたとし、県議選の25.6%を約10割上回った。逆に「投票日当日」と答えたのは県議選が22.1%、市議選は15.9%だった。

国の方角性を決める国会議員や、地域に根ざした問題を扱う市町村議員に比べて、県議の活動は見えにくく、指摘されることが多く、「中二階」と揶揄される。今回の調査でも、国・地方合わせて6種類の選挙の

中で「一番関心のある選挙」を聞いたところ、最高は衆院選の40.7%。以下、市長選12.4%、市議選10.4%と続き、知事選8.4%、参院選4.1%で、県議選は最も低い3.3%しかなかった。ただ、今回の統一地方選への関心の有無では、関心を持ったとする人が約7割に上っている。

何を理由に候補者に投票したかを聞いたところ、市議選では「支持する政党の候補者」が19.7%で最も多く、「掲げている政策や公約に賛成」(19.3%)、「これまで経歴や実績」(18.1%)、「人柄が良さそう」(15.3%)と続いた。県議選は「支持する政党」が21.2%でトップ、「経歴・実績」(19.4%)、「政策・公約」(16.1%)などの順だった。

松本教授は「今回の調査で、県議の存在感の薄さ、県議会自体の存在感が希薄だということが改めてわかった。選挙で有権者が何を頼りに選べばいいか、判断基準がなく、困惑している姿が浮かび上がっている」とし、「実際に今回の投票で、市議選の白票が40.4%、県議選の白票が49.9票だったのに対し、さいたま市内分の県議選の白票が1万519票と約2.6倍もあったのは、そうしたことの表れ」と分析している。

■「中二階」

■白票2.6倍

埼玉大学経済学部の松本正生研究室が読売新聞さいたま支局と協力し、統一地方選前半戦(県議選、さいたま市議選)に関して、さいたま市民を対象に行った世論調査で、選挙で大勝した民主党の明確な支持層は回答者の3割程度にとどまり、無党派層などに支えられていることが浮き彫りとなった。

今回の調査に回答した人のうち、県議選で投票したと答えたのは約7割。だれに投票したかを聞いたところ、自民候補と答えたのが37.5%と最も多く、民主候補20.2%、公明候補4.4%などだった。

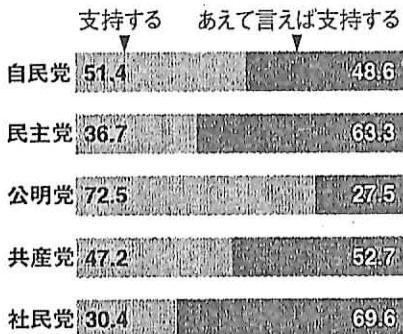
実際に投票した人の支持政党をみると、自民候補に投票した人の約6割は自民支持

① 世論調査 さいたま市統一選 大 埼

自民 得票6割が支持層 民主 無党派なども6割

層、残りは無党派層または他党支持層だった。民主候補の場合は約4割が民主支持層で、無党派層や他党支持層の方が2割以上も多かった。強固な地盤を支えとする自民候補に対して、民主候補は固定的な支持者が少ないため、無党派層などへの支持の広がりや勝敗の鍵を握っていることが裏付けられた。また、創価学会という支持団体を持つ公明候補に投票した人の約6割が公明支持層だった。

各党別の支持者の内訳 (数字は%)



支持する

あえて言えば支持する

支持する政党の有無について、「支持する政党がある」と答えたのは37.7%、「ない」は56.7%に上った。支持政党がないとした、いわゆる無党派層に「あえて選ぶとしたらどの政党か」と問うと、7割の人がいずれかの政党をあげた。二つの質問とも「ない」と答えた「完全無党派層」は全体の13%いた。

「支持する」「あえて言えば支持する」を合わせた各党の支持率は自民約38%、民主

約30%、公明約6%、共産約5%などとなった。各党ごとの支持者の内訳を見比べると、民主が「あえて言えば支持」が6割に達するのにに対し、自民はほぼ半々、公明は「支持」が7割を占めるなど違いが出た(グラフ)。

松本正生教授は、無党派層のうち、あえて聞けば支持政党をあげる人たちを、「そのつど支持層」と名付け、「特定の政党への強い好意や親近感を持たないが、政治に関心はある」と位置づけている。こうした傾向を持つ層は若者だけでなく、幅広い世代に広がっているとし、「夏の参院選で、自民、民主両党がどれだけ『そのつど支持層』をひきつけられるかが、勝敗を左右するだろう」との見方を示している。

◆そのつど支持

支持する政党の有無について、「支持する政党がある」と答えたのは37.7%、「ない」は56.7%に上った。支持政党がないとした、いわゆる無党派層に「あえて選ぶとしたらどの政党か」と問うと、7割の人がいずれかの政党をあげた。二つの質問とも「ない」と答えた「完全無党派層」は全体の13%いた。

「支持する」「あえて言えば支持する」を合わせた各党の支持率は自民約38%、民主